

神林寿幸・『公立小・中学校教員の業務負担』・大学教育出版会（2017）

高木 亮

就実大学 takagi@shujitsu.ac.jp

筆者は平成 20 年に東北大学に入学し 3 年次に東日本大震災に被災、在学中に 3 つも研究賞を受賞、平成 29 年に東北大学大学院博士課程を修了している。修了後は新設の独立行政法人教職員支援機構研修特別研究員に入職、英国派遣などで教員国際比較研究や先端統計手法の技術習得をはかりつつ、現職教員対象の研修企画・実践も果たしてきた。本年 9 月からは明星大学教育学部講師として教員養成にも携わることとなった。本書は筆者の博士論文を書籍として大幅に再編集したものである。別の論文である被災地 1 万人超の教職員の健康・多忙に関するマルチレベル分析の報告(神林 2015)も踏まえれば、筆者が教員と学校に温かい視点を持ちながら、最先端の縦断的な数量分析を駆使して学校改善を探ろうとする姿勢が理解できよう。筆者を見れば優しさも科学の力が伴わなければ無力にすぎないことを逆説的に思い知らされる。

本書は本文 216 頁、60 の図表はいずれも先端的で縦断性の強い統計分析か戦後教育史における教員の職の変化の歴史記載の詰まったものである。引用文献数は 205 部、うち 32 部は日本語未訳の英文書籍・論文である。実証分析の対象となった素材は多様で個性的選択がなされている。1950 年の教員勤務時間の調査データを最古とする 14 の時代別の労働時間調査の再分析(第一章)の他に、公刊統計である「公立学校教職員人事行政調査」(第二章)、平成 18 年度文部科学省委託調査研究「教員勤務実態調査」(東京大学, 2007)(第三・四章)、OECD の国際教員指導環境調査『TALIS2013』(第五章)等からなる。質的分析として大正 14 年を最古とする新聞記事分析を併用し、特にこの 30 年間の社会からみた教員の多忙・長時間労働の議論の分析(序章, 第二章)を行っている。統計分析と戦後教育史の記録分析を実証根拠とし、国際比較も交えることで「従来の教員の業務負担に関する研究は、十分かつ適切な実証に基づくことなく、教員の業務負担を規定する要因として、事務処理などの周辺の職務に重きを置いてきた」が、多忙の主因は「生徒指導に伴う今日の日本の教員の業務負担」(pp.201-202)にあることを導出している。また、教員の多忙問題の改善は「『本来的な業務である生徒指導は、教員に負担をもたらさない』という暗黙の前提」(p.204)で今までの学校改善論が組み立てられているため今後も「多忙化が一層進展する」(p.205)と予言する。加えて、「学校教育や教員が担う教育活動を再編するのは難しい」(p.207)と断言し、多忙問題解決の難しさを指摘する。多くの学校教育関係者がどこか気づいていながら無理に信じようとしてきた“周辺の職務(書類・調査といった事務業務)の多忙は改善できる”という「包帯のような嘘」(中島みゆき『世情』)を圧倒的な分析力で否定し、“学校改善の視点で直視すべき時が来た”と筆者は指摘しているといえる。

「周辺の職務」論の提唱者の一人が評者であり、筆者は上述のように圧倒的分析力でこれを葬り去った。葬り去られた評者は優れた若手研究者に敬意を示しつつ、筆者と学校改善学へ今後の課題を提案したい。対価・負担(コスト)だけでなく成果(パフォーマンス)も合わせて考える必要性である。守るべき成果の上でこそ負担の調整を考えないとコスト・パフォーマンスは議論できない。労働負担は人的経営資源であり予算や物資、情報などに並ぶ教育成果に払う対価の一領域である。この 20 年、例えば教育改革の中での仕事のやり方の変化(情報としての経営資源)や、教育機器・設備の急変(物資としての経営資源)、また、学校教育の予算の難しさも続き、学校の経営資源確保困難は続いている。これらの代わりを補う意味で教職員(人的資源)

は多忙や勤務時間増に甘んじてきた。しかし、人的資源にも限りがきていることを本書は証明した。今後は“多忙に甘んじてまで何を果たそうとしてきたのか？”に配慮と探求を要するよう感じられる。つまり、学校教育は“何が成果なのか？”という問いである。“学力(学校で身に付ける力)”としか答えようがないが、この言葉はあまりに幅広く人それぞれで定義が異なり齟齬が生じやすい。ここに探求と議論と整理と提案を果たしうる学会は日本学校改善学会であり、学会の核の一人が筆者である。次の時代の学校改善を期待する。

参考文献

- 神林寿幸(2015)「教員の業務と健康状態への影響調査」青木栄一編『復旧・復興へと向かう地域と学校』東洋経済, 229-258.
東京大学(2007)『教員勤務実態調査(小・中学校)報告書(平成18年度文部科学省委託調査研究報告書)』